古文の授業と教材研究

文学部教授
蔦尾和宏

つたお　かずひろ

神奈川県横浜市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学。博士（文学）。2017年4月、専修大学文学部に着任。専門は日本中世文学、特に説話・歴史叙述。著書に『院政期説話文学論』（若草書房、2015）、共著に『新注古事談』（笠間書院、2010）、『古事談抄全釈』（笠間書院、2010）など。

◆古文の授業はつまらない…

私は日本の中世文学、特に11世紀後半から14世紀にかけての説話や歴史叙述の研究を専門としています。ですので、主として中世文学について講義しているのですが、この他、国語の教職課程の授業も担当しています。一般的に、最も多く古典文学に触れる機会は、高校までの古文の授業でしょうから、皆さんになじみの深い古文の授業と古典文学という側面から自分の専門にまつわるお話をしたいと思います。

さて、この古文の授業ですが、あまり良い思い出とともに語られないようです。古文の授業の印象を聞けば、退屈だったという答えがもっぱら返ってきて、昼食後の古文の授業など、不眠症の人を治すにはもってこいというところでしょうか。もっとも、品詞分解をして、助動詞や敬語の説明があって、現代語訳して終わり、こんな授業なら、一般人より古文に耐性のある私でも途中で意識を失う自信があります。また、教材の古文自体が、教育という目的ゆえに、毒にも薬にもならない内容だったり、毒を含んだ文章なのに、解毒されたつまらない解釈で読まれたりと、授業のつまらなさを強力に側面支援することも珍しくありません。これでは、学生が居眠りしても、責めるのは酷というものです。

◆文学の毒を楽しむ
――逆ギレ坊主と極楽往生――

私の専門で、古文入門の教材としてよく使われる作品に、鎌倉前期に成立した説話集『宇治拾遺物語』があります。『宇治拾遺物語』の文章は確かに

平明ですが、読み解くのはなかなか難しい、文学の豊かな毒をたっぷり含んだ、したたかな作品なのです。今回は、宗教が力を持った時代相に相応しい、極楽往生にまつわる一話（55 話）を以下に要約し、教材として分析してみましょう。

薬師寺の別当（長官）は寺の財物には手をつけず、一心に極楽往生を願っていた。念仏を唱えて亡くなりそうなところで持ち直して弟子を呼び、「極楽に行くつもりが、地獄の迎えが来た。私が寺から米を五斗、借りて返していない罪だそうだ。その程度の罪で地獄に落ちるいわれはない。すぐに一石（五斗の倍）を布施にしろ」と命じて返させると、今度は「極楽の迎えが来た」と、喜んで亡くなった。この程度で地獄の迎えが来るのだから、好き放題に寺の財産に手をつけている諸寺の別当の「地獄の迎へ」が思いやられる。

さて、この説話をどう読むかですが、説話は多く、話の最後（話末）に、作品がその話をどのように理解したかを示す部分が付されますので、その部分（話末評語と言います）に着目して、当時の大寺院の偉い坊さんたちは寺の財産に手をつける生ぐさ坊主が多かった、だから、この話はそのような坊さんを戒めるための話だ、というあたりが無難な線でしょう。

その上で、別の角度から本話を考えてみます。私が考える本話の最大のツボは、「その程度の罪で地獄に落ちるいわれはない（さばかりの罪にては地獄に落つべきやうなし）」という別当の言葉です。これは考えてみると、とんでもない言葉ではないでしょうか。そもそも、自らの修行に対して神仏からダメ出しをされたとき、信仰心篤い人間ならば、こんな反応をするはずがありません。他の説話などを見れば、自らの至らなさを後悔・懺悔したり、嘆いたり悲しんだりするのが普通です。ところが、別当は悔いるどころか、逆ギレする始末。だいたい、往生の可否を判断するのは、全知全能の絶対者である仏様であって、小賢しい人智の能くするところではありません。それに対して、「この程度の罪で…」と異議を唱える別当は、仏様よりも自分を上位に置いているに他ならず、これは仏法では「驕慢」という重い罪を犯していることになるのです。

別当がこのような人物となると、五斗を一石で返した借財の倍返しも、とても懺悔や謝罪からの行いとは考えられず、むしろ「倍にして返せば文句はないだろ」という開き直りに見えてきます。

なぜ別当がここまで強気に出られたのか。それは、自分の修行に絶対の自信があったからでしょう。本話には、別当が寺の財に手をつけなかったと特筆されていますが、こんなことが特筆されてしまうのは、寺のお偉方が寺の財産を私するのが当たり前だった世相が前提になければあり得ません。ですから、別当はふだんから、自分は他の堕落した坊さんとは違うという強烈な自負を抱いていたに違いありません。さらに修行に専念していたというのですから、二重三重に自信を深めていたと想像されますが、他人と比較して自分が優れていると考えるのは、これまた「驕慢」そのものなのです。

神仏へのまなざし

話の結末は、借財を倍にして返した別当が極楽に往生したかに見えますが、自らの大きな罪を自覚しない彼に真の往生が許されたのか――本文には「極楽の迎へ」が来たとあっても、極楽に往生したとは書かれていません。魔が「極楽の迎へ」を装い、死にゆく者をたぶらかし、来世を危うくする「魔往生」という現象もあったのです――、色々と考えさせられる一話です。

本話には、信仰に生きるはずの坊さんが実は仏にもっとも懐疑的であったという皮肉な逆説が読み取れます。この他にも、『宇治拾遺物語』には神仏からの御利益が少ないと、神仏に異を唱える人間も登場し、中世は宗教と迷信が幅をきかせた時代と思われがちですが、既にこのような冷めた視線もまた存在していたのです。

以上の解釈は、現代語訳からでも十分、読み取れますから、助動詞、敬語、品詞分解は必ずしも要りません。そして、時代を超えて、人間という存在を考えるヒントが様々に含まれています。教材とする文章に切り込み、生徒に考えさせるべき、伝えるべき何かを見つけるのに研究・努力を積み重ねる、教職を志す学生の皆さんにはぜひそのような教員になってほしいと願い、日々の授業に臨んでいます。